

論文審査の結果の要旨

報告番号	博（水・環）甲 第9号	氏 名	馬 叢慧
学 位 審 査 委 員	主査 連 清吉 副査 早瀬 隆司 副査 戸田 清		
論文審査の結果の要旨			
馬叢慧氏は、2012年4月に長崎大学大学院水産・環境科学総合研究科博士後期課程に入学し、現在に至っている。同氏は、水産・環境科学総合科学研究科に進学以降、環境海洋資源学を専攻して所定の単位を修得するとともに、売茶翁の伝記、交友と思想を中心に研究し、その成果を2015年3月に主論文「売茶翁研究」に関する研究として完成させ、参考論文として、学位論文の印刷公表論文3編（うち審査付き論文3編）を付して、博士（学術）の学位の申請をした。長崎大学大学院水産・環境科学総合科学研究科教授会は、2014年12月17日の定例教授会において論文内容等を検討し、本論文を受理して差し支えないものと認め、上記の審査委員を選定した。委員は主査を中心に論文内容について慎重に審議し、公開論文発表会を実施するとともに、最終試験を行い、論文審査および最終試験の結果を2015年2月18日の水産・環境科学総合科学研究科教授会に報告した。 売茶翁の先行研究について、主に、伝記、年譜、資料集、論文に分類して紹介したが、売茶翁は61歳から京都で通仙亭を開業し売茶を開始したことが従来までの定説であり、売茶翁の47歳—57歳までの十年間について明らかとされていない。しかし、この期間こそが、売茶翁にとって最大の個性でもある「京都で売茶を行った」という事象につながってくるもので、これらの空白期間についての考察は、売茶翁を検証する際に必要不可欠なものである。本研究はまず、伝記の記載について整理、さらに売茶翁の詩作の分析により、その空白の十年間は売茶活動が行われていた確証を得た。第二に、煎茶史における売茶翁の位置づけについてである。従来、売茶翁は煎茶道の「中興の祖」や「始祖」「開祖」と呼ばれてきたが、売茶翁が煎茶において抹茶の法式、手前を模倣して、芸道化を意識していたのか、あるいは煎茶道と、その「中興の祖」とされる売茶翁の精神性とが一致するかどうかについても検討し、売茶翁自身の言動を鑑みると、必ずしも抹茶道の様な芸道化を求めていることから、売茶翁の煎茶精神は煎茶道と完全には一致せず、煎茶道の「中興の祖」と位置付けるには十分検討を要するという結論に至った。第三に、売茶翁の交友関係については、実際の交友の記録である書簡や詩文を通じて、売茶翁の精神性や人物像を読み取り、特に、売茶翁と			

同じ龍津寺で化霖禅師に師事した大潮との間については、これまでは売茶翁が自ら龍津寺の住職にならなかった理由を、売茶翁より大潮の方が学識が優れていたこと、売茶翁自身が禅の指導者としての自らの資質の限界を知り、その資格がないのに安閑と寺の食を食むことを自ら許すことができなかったことなどとされてきたが、売茶翁と大潮の文章を分析することによって、師の化霖は臨終の時に遺言を残し、その遺言により大潮が龍津寺を継ぐこととなったと考えるのが最適だという結論に至った。また、大潮の文章と詩作を通じて、売茶翁に関する理解が極めて深いことが判明したとともに、大潮の売茶翁に対する尊敬や憧憬の念も明らかとなり、売茶翁にとっては知音とも言うべき貴重な理解者であった点を具体的に示すことができた。

第四に、売茶翁の漢詩において、莊子からの出典と思われる内容が多数含まれているのは事実である。また、黄檗僧から還俗して後に、自ら名乗った「高遊外」という名前もまた、『莊子』の由来であると思われる。従来まで売茶翁が残した漢詩について、仏教関係者、煎茶道関係者は大半を仏教典が出典として解説してきたが、実際に売茶翁の漢詩には莊子からの出典と思われる内容も多く含まれている。本研究は売茶翁の詩の分析を中心として、売茶翁の思想を分析する際に、その生涯を、売茶翁が煎茶を始めるまでの第一期、還俗し「高遊外」と名乗るまでの第二期、還俗後の「高遊外」時代の第三期に分類し、特に第二、三期の詩作の分析により、売茶翁の生涯には「脱俗、入俗、超俗」の特徴を見出した。売茶翁の詩作に『莊子』に関する内容が多く存在するのは、ただ修辞上の問題ではなく、売茶翁の思想の中核となるものと判明した。つまり売茶翁にとって煎茶を売することは、莊子の「逍遙遊」の体現でありながら、莊子の「逍遙遊」に対する根本的な追求でもあった。売茶翁の思想の背景には莊子の「遊」の思想が見受けられ、これらを結び合わせることで、従来までの研究では明らかにされなかった売茶翁の思想の深い考察が可能となったことは、本研究における大きな成果である。

本研究は、江戸時代における売茶翁の人物像の描写の変遷を考察することで、売茶翁の江戸時代におけるイメージの変化を明らかにする。そして、そのイメージと売茶翁自身の思想との関係について究明するができ、評価されて然るべきである。

学位審査委員会は、本研究は先行研究を踏まえて文献を比較分析し、中国古典に基づいて売茶翁や大潮などの漢詩を解釈し、先行研究の再考及び売茶翁の思想の究明といった研究目的の達成することは、博士（学術）の学位に値するものとして合格と判定した。